

JAPAN GOLF ASSOCIATION

JGAGolf Journal



公益財団法人 日本ゴルフ協会

日本のゴルフが、日本のチカラに。
Green Tee Charity

ゴルフのあり方を守り、伝え、広める

R&A新キャプテン ピエール・ベッシュマン氏インタビュー

「コンニチワ。ドウゾヨロシク」長身をかがめ、手を差し出してきたベッシュマン氏は、そう日本語で挨拶してくれた。昨年9月にロイヤル・アンド・エンシェント・ゴルフ・クラブ・オブ・セント・アンドリュース(R&A)の新キャプテンに就任した同氏は1987年から2年間、国際法弁護士として日本に滞在した経験があるという。R&Aキャプテンの役割は、ひとことで表すと「ゴルフ大使」だと同氏は言った。「R&Aそしてゴルフ界を代表して世界を訪れ、ゴルフの発展を目的として世界と交流を図るのがメインになります」。親日家でもある新キャプテン、ゴルフ普及のために日本にも大いに期待していることがあるとも語った。



ピエール・ベッシュマン氏

Mr. Pierre Bechmann

1957年パリ生まれ。国際法を専門とする弁護士でフランスゴルフ連盟のエグゼクティブコミッティー、ヨーロッパゴルフ協会のチャンピオンシップコミッティー。2010年からホームコースであるパリ市内のゴルフ・ド・シャンティエのプレジデントを務める。2008年から2年間ロイヤル・セント・ジョージズ・ゴルフクラブのキャプテン。R&Aではゼネラルコミッティー、ルール委員なども歴任した。2012年9月R&Aキャプテンに就任。ハンディキャップは9。

聞き手・構成: JGAオフィシャルライター 塩原義雄

R&Aのキャプテンとは？

— メンバーシップ倶楽部のキャプテンというと、会員の代表であり倶楽部対抗競技などのチーム代表なども務める役割を担うという認識がありますが、R&Aキャプテンもそうした立場にあるのでしょうか？

ベッシュマン 確かに会員の代表という面もありますが、それよりもR&Aのゴルフ大使という役割の方がメインになります。英国、ヨーロッパ各国ばかりでなく、アジア、太平洋諸国を巡り、先々でR&Aが関連するチャンピオンシップに出席したり、各国ゴルフ協会の年次総会に招かれてスピーチするなど、ゴルフの発展、伝承を目的に交流を図る役割を務めます。

— R&Aキャプテンに就任すると、お披露目の競技会が開催されると伺っていますが？

ベッシュマン ええ、2012年9月の年次総会でキャプテンに選ばれて、それは行われました。R&Aでは、それを伝統の競技(クイーンデレードメダル)であると認識しています。セントアンドリュースOldコースの1番ホールで大勢の関係者が見守ってくれる中で、私は傍に設置された年代ものの大砲の発射とともにティーオフしました。かなりのファインショットだったと思います。実は、出場者は私ひとり、ティーオフした段階で優勝者になれるのです。打ったボールは、キャディーが拾い、プレーヤーに届けてくれることになっています。私は、それを受け取り、そのお礼にギニー金貨を渡し、メダルをいただきました。そして、我が家紋の入った銀のゴルフボールをコースに寄贈しました。クラブハウスには、歴代キャプテンの銀製ボールがまとめて飾られています。古くはR&Aのキャプテンは、競技によって決められていました。18世紀初頭からは選挙によって選ばれるのですが、たった一人の競技は、古き伝統の名残なのです。

正しいゴルフのあり方を守り、伝え、広める

— ゴルフ大使というと、世界にゴルフを広める役割を担うとのことでしたが…

ベッシュマン はい、ゴルフは素晴らしいスポーツです。ただ、私が強調したいのは、正しいゴルフを広め、伝えるということです。ちょうどいい話があります。もう、5、6年前のことなのですが、私はUSGAの元会長(1983年)でR&Aの歴代キャプテン(1987、1988年)でもあったビル・キャンベル氏とラウンドする機会がありました。私たちはホールマッチで戦ったのですが、14番ホールのフェアウェイでキャンベル氏が突然ボールを拾い上げて私に言ったのです。「このホールは、君の勝ちだ。いま、アドレスしようとしたらボールが動いた」。私は同氏に尋ねました。「アドレス前だし、風の影響ではないのですか？」同氏は言います。「そうかもしれない。でも、君は、そう断言できるかね。もし、私がボールの近くに立ってなくても、それは動いたと思うかね」。私は答えました。「イエス、とは断言できません」。同氏は笑みを浮かべて言いました。「そうだろう。どちらとも断言できないことが起こったら、自分に不利な裁定になる道を選択する。それがゴルフさ。だから、このホールは、君の勝ちでいいんだ」。

現在はルールが一部改正されて、自然現象によってボールが動いてもペナルティー対象とはなりません。私がここで言いたいのは、誰もがゴルフを心から愛し、正しく理解するゴルファーであっていただきたいということです。そういうゴルフを広め、伝承していきたいのです。自分たちが愛しているゴルフを次の世代に伝えていくことも大切なことだと思っています。

スロープレーの戒め

— プレーを早くする。これもグッドゴルファーの条件ですよね？

ベッシュマン そのとおりです。なぜ、スロープレーを戒めなければならないのか。その理由もゴルフの精神にあります。ゴルフは、ただ自分が楽しむだけではなく、そこにいる誰もが楽しめるようであればいけません。自分がプレーしたら、早く次の人たちにその場を譲って楽しんでもらう。走ってプレーする必要はありません。速く歩き、早く決断してショットする。あるいはパットする。気配りとか思いやり、尊敬…それらは、ゴルフの根幹に横たわるものです。日本人がゴルフ好きであるというのは、私から見て少しも不思議なことではありません。日本人の国民性とか精神がゴルフをより深く楽しむ大きな要素になっているからです。実際に私は日本の多くのグッドゴルファーを知っています。日本がゴルフに持ち込んだもの。それはコツコツ前進する努力を惜しまない姿勢です。それは、ヨーロッパ諸国も逆に取り入れたことです。日本は、R&Aから見てもゴルフへの影響力を強く持った存在です。ファインゴルファー、グッドプレーヤーをたくさんプロデュースしてきました。ですから、正しいゴルフを広め、伝承していくべくリーダーシップをとっていただきたいし、期待もしています。

ジュニア育成は次世代に伝承するための一環

— 伝承するためには、ジュニアゴルファーの育成も欠かせませんよね？

ベッシュマン 伝承してくれるヤングゴルファーがいなければ、叶わないことですからね。R&Aでは、世界に門戸を広げたジュニアオープンをはじめ18歳以下のボーイズチャンピオンシップなど数多くの競技を開催しています。そればかりでなく、アジア、太平洋地区の多くの国にコーチを派遣しています。このコーチは、生徒を直接教えるのではなく、その地の若い人たちを育てる現地のコーチたちを育てます。何人ものコーチが生まれれば、生徒も急激に増えるでしょう。生活にゆとりがなく、ゴルフクラブなどの用具を手に入れられないようなところには、用具を定期的にも送ることもしています。



リオ・デ・ジャネイロ五輪は大歓迎

— リオ・デ・ジャネイロ五輪からゴルフがオリンピック競技に復活しますが…

ベッシュマン ゴルフ普及のためにもすごくいいことだと思います。ゴルフはスポーツなのだという認識の広まりも期待できます。ゴルフが世界でポピュラーになること。多くの国がゴルファー育成にさらに熱心に取り組むようになるでしょうし、育成、強化のための環境作りや予算確保も期待できます。R&Aでは、リオ・デ・ジャネイロの郊外に9ホールのパブリックゴルフ場を造りました。学校も併設してあります。学校にいけばゴルフもできる。ゴルフ場にいけば勉強も教えてくれる。そういう環境を与えたかったのです。ゴルフが上手ければいいとか、ゴルフ以外には興味がないというジュニアゴルファーを増やすのは上策とはいえません。確かにヨーロッパでも早くにゴルフに専念してプロになっていく風潮がなくはありません。でも、実際にプロになれる人は一握りでしかありません。もちろん、プロを目指す道はあ

るのですが、そこを歩み続けることができなくなったらどうするのか。そうしたこともケアしておく必要があります。自分の人生の選択肢を広げておくことも忘れてはならないでしょう。そういう意味でゴルフ場と学校を並立したのです。オリンピックゲームに復活したのは喜ばしいことなのですが、ポピュラーになることで、これまで続いていたゴルフが違うものにならないように、ゴルフが持っている価値、本来あるべき姿をしっかり守れるようにしていくことをおろそかにしてはいけません。ファインゴルファー、グッドプレーヤーを育てなければならないというのは、そこです。

— ちょっと変な質問です。オリンピックの表彰式でメダルを獲得した選手たちが他のスポーツのようにジャージー姿で台に立ったら？

ベッシュマン それは想像できませんね(笑)。やはりジャケット着用で表彰式に臨むでしょう。もちろん、私の立場でそれを強要するわけにはいかないし、その権利もありませんが、ゴルフには、それにふさわしい服装があると思います。そうしたことも含めてゴルフだと考えます。

インタビュー後記

ベッシュマン氏へのインタビューは、JGAの小会議室で行わせていただいた。そのインタビューを終えて、すぐに事務局に足を運んだ。ルールブックを読み返したくなったのである。「ゴルフ規則」のページをめくる。第1章は「エチケット」。ここで、ゴルフというゲームは、どのようにプレーされるべきか。プレーする上でのルールよりも、まず、エチケットについて書かれている。それをマナーと言い換えてもいい。ここには、ゴルフの腕前とは別に、それ以前にゴルファーとは、どうあるべきかが書かれている。「どのようなときでも誠実で、礼儀

正しくスポーツマンシップを常に示しながら洗練されたマナーで立ち振る舞う」ゴルフの精神である。ゴルファーには、まずゴルフの精神を全うできる資質が求められている。ベッシュマン氏の話から、氏はゴルフ普及に尽力しながら、ただ、ゴルフを広めるにとどまらず、そのゲームを楽しむ、さらにその楽しさを分かち合えるグッドゴルファーの集まりにしたいという願いが伝わってきた。そこで、この第1章を読み返したくなったという次第だ。プレーする前に、ゴルフを愛し、ゴルフから愛されるプレーヤーであること。多くのゴルファーに、もう一度第1章を読み返していただきたいと思った。

ゴルフのオリンピック競技採用

五輪競技採用で、世界のゴルフが様変わりする。

オリンピックゴルフ競技対策本部 広報・プロモーション企画委員会 オフィシャル・スポークスマン 中嶋常幸インタビュー

聞き手・構成：JGAオフィシャルライター 三田村昌鳳

オリンピックで感動を与えられるゴルフへ。プロ・アマという枠組みにこだわらず、世界に通用する選手をすべてのゴルフ関係団体が、まさに「オール・ジャパン」で一致協力し、向かっていかなければならない。



2016年のリオ・デ・ジャネイロオリンピックから、ゴルフが実施競技(※)となった。すでに日本でもオリンピック競技対策本部(JGA、JGTO、PGA、LPGAが一致協力)がスタートして組織的に選手強化も図ろうとしている。

そして日本のオリンピック・オフィシャル・スポークスマンとして中嶋常幸氏(プロ)を起用した。

「ゴルフ一筋で精進してきた、ひとりのゴルファーとして、とても嬉しいことであると同時に、できれば、もっと早く、私がピークのときに実施競技になったら、ぜひ、国を背負って挑戦したかったという気持ちですね(笑)。でも、正直な話、このオリンピックにゴルフが実施競技になったということは、日本のゴルフ界にとって、これは千載一遇のチャンスなんです。よりスポーツとしてのゴルフが普及し発展していくためにね。そして世界的レベルにアップグレードできるチャンス。だからこそ、これから4年間、メダルを意識して過ごさなければなりません。」

メダルを意識しての4年間…そのためには、日本のレベルアップを図ることが最優先事項である。果たして、その可能性はあるのだろうか。

「いや、残念ながら、このままの状態だと日本のゴルフは、メダル獲得圏内に入ることは、とても難しいと思います。世界のゴルフは、アメリカばかりでなく、欧州、豪州、韓国、南アフリカなど強豪が揃っています。ですから、日本のゴルフのレベルをメダル圏内に高めるために、私も、声を大にして、そして機会あるごとにレベルアップを図るべく提案し、率先して行動したいと思っています。」

現時点では、オリンピックに出場できる選手は男女60名ずつ。選考基準は男女とも世界ランキングを用い、上位15位以内は1ヶ国最大4名まで、16位以下は各国2名までが参加できる。これは実施競技に採用されるときに提出した選考方法で、これからさまざまな角度から審議、精査して、正式な基準がでる可能性は大きい。しかし、いずれにしても、



現在建設中の2016オリンピックリオ・デ・ジャネイロ大会ゴルフ競技開催コースレイアウト図(hansegolfdesign.comより)

世界ランキングという尺度で選ぶという方法は、残ると予想される。

「選手強化は、ゴルフ界はもちろんのこと、できれば国を挙げてバックアップして欲しいと思います。いま日本のゴルファーは、プロもアマチュア選手も、どうしても個の努力、財力に頼らざるを得ません。

個の力では限界値がどうしても低くなる。やはり国を挙げてゴルフという競技でメダル獲得のために総力で取り組まないといけないと思います。

少なくとも、オリンピック候補となりうる若い選手達、あるいはもっと広く視野を持てば、2020年東京招致を考えると、その時に活躍する選手は、今の中学生、高校生になるはず。4年後を見ても、やはり高校生、大学生、そして20代前後の若いプロゴルファーたちの活躍にかかるわけです。つまりは、そういうジュニア選手たちから強化していく環境整備が急務ですね。

今年のロンドンオリンピックで多くの日本人選手が、

さまざまな競技でメダルを獲得しました。その感動は、誰もが忘れることのできないシーンとしてずっと記憶されると思います。もちろん選手たちの努力やがんばりもありますが、その奥に国を代表して戦うという背景が映り込みますよね。だから感動もひとしおなんです。

同じように、ぜひ、2016年からのオリンピックでも、ゴルフがそういう感動を与えられたらと思います」

つまり、これからはプロ・アマという枠組みにこだわらず、世界に通用する選手をすべてのゴルフ関係団体が、まさに「オール・ジャパン」で一致協力してオリンピックに向かっていかなければならない、ということなのだ。

日本ゴルフ協会は、アマチュアの日本ランキングを実施し、さらにジュニア強化の取り組みも図るという。

目指すは、まず日本のプロゴルファーの世界への挑戦だ。